九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドの遺稿『ル・ラミエ』 : 森鳩は歓びとともに飛びたつ

小坂, 美樹
大阪大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/4355464

出版情報 : Stella. 39, pp.249-261, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

ジッドの遺稿『ル・ラミエ』
――森鳩は歓びとともに飛びたつ――

小　坂　美　樹

2002年，ガリマール社よりアンドレ・ジッドの遺稿『ル・ラミエ』が公刊された[1)]。作家の一人娘カトリーヌ（2013年逝去）が「エロチックな掌編（une petite nouvelle érotique）」[2)]と呼ぶように，見出された7枚の原稿には，1907年の夏，ジッドが友人ウジェーヌ・ルアールの経営する農場で出会った若者フェルディナンとの愛の一夜が記されていた。

「ラミエ」の意味は森鳩。フランスではごく普通に見られる鳥で，首周りの白い羽毛と独特の鳴声を特徴とする。官能的な一夜の後，ジッドはフェルディナンを「ル・ラミエ」と名付けた。若者が「愛の行為において，その夜，鳩のような実に優しげな声をあげたから」[*R*, 31]である。

ジッドは自らの性的指向――若い男性を対象とする少年愛（ペデラスティ）――を早い時期から自覚し，受け入れ，さらには社会に対して，そうした性愛のありかたを正当化，少なくとも擁護したいと考えていた。『コリドン』の出版はまだ先のことだが，そのための準備はかなり早い時期から（1907年にはすでに）始められていた[3)]。同性愛擁護の書『コリドン』がいわば理論的な側面を持つのに対し，自伝『一粒の麦もし死なずば』（以下『一粒の麦』と略記）では，同性愛こそが「自らの正常態（ma normale）」[4)]であるとの確信にいたる過程が具体的に語られる。またフィクションにおいても，「あえてその名を言わぬ愛」[5)]は，直截な表現こそ避けられているものの，たとえば『法王庁の抜け穴』の一節がクローデルを激怒させたように，十分に観取可能なかたちで描かれた[6)]。

『ル・ラミエ』はそれゆえジッドのセクシュアリティについて大きな変更を加えるような発見や驚きをもたらしたわけではない。ただし日記や書簡に記されていた「ラミエ」ことフェルディナンとの関係について，従来解釈が保留されていた空白を埋めた意義は大きい。ジッドの筆に「ラミエ」が現れるのは，1907年8月1日の日記――

7月28日の素晴らしい一夜については，別のところに書きつけ，封筒に入れた。（7枚のかなり大判の用紙）（バニョル――1907年7月――フェルディナン――ル・ラミエ）[7]

この記述は，プレイアッド版『日記』の旧版（1951年）には収録されていない。1996年の新版ではじめて採録されるが，その註には「このバニョルでの一夜に関する原稿は見つかっていない」とある[8]。同夜の出来事を詳細に明かす7枚の原稿は，100年近い時を経て，ようやく我々のもとに届いたのである。

『ル・ラミエ』は，その短さを考慮に入れぬとしても，完成した作品とは言いがたい。それは美しい若者との一夜の記録であり，感動冷めやらぬうちに，おそらくは翌日か少なくとも二，三日のうちに一気に書かれたと考えられる。場所も人もすべて実名で記され，また若干きわどい性描写もあるため，作者も原稿をただちに世に出せるとは考えていなかったであろう。しかし原稿が彼自身の手で「丁寧に」[9]封筒に入れられ保管されていた事実は，何らかのかたちでの刊行が視野にあったことを示すものだろう。だが結局は，この掌編が作家の存命中に公になることはなかったのである。

たしかに『ル・ラミエ』は作品として十分な体裁が整っているわけではない。しかし，文学的修正や社会的配慮を加える前であるからこそ，ジッドの性愛のありかたが偽りなく示されているとも言えよう。そこに描かれるフェルディナンもまた，ジッドが見て感じたとおりに記述されているはずだ。にもかかわらず，この農場の青年は驚くほど「文学的」である。フェルディナンは，その描写を通して，ジッド作品に現れる若い男性たちと結びついているのだ。

小論では，『ル・ラミエ』に描かれた農場で働く若者がジッドの考える性愛の理想を体現していることを確認すると同時に，なぜこの若者が作品に――フィクション・ノンフィクションにかかわらず――ふたたび現れなかったのか，言い換えれば，『ル・ラミエ』がなぜ未刊にとどまったのかについて考察したい。

1907年7月28日夜

『ル・ラミエ』が書かれた背景については，同作の校訂者デヴィド・H・ウォーカーによる後書きに詳述されているので，ここでは概略のみを示す。先述のように1907年の夏，ジッドはフランス南西部にあるウジェーヌ・ルアールの農地バニョル・ド・グルナードに滞在中であった。両者は1893年以来の友人で，一

方は文学，他方は農場経営と，生き方は異なるものの，年齢も近く，何よりも性的指向を共有する「仲間（カマラード）」でもあった。7 月 28 日の夜については『ル・ラミエ』冒頭に明示されている――

> その日（1907 年 7 月 28 日），郡会議の選挙があり，ちょうどその地の郡庁所在地フロントンの祭りの日であった。ウジ〔ェーヌ〕は，これといった対立候補もなく，楽々と当選していた。［*R*, 21］

祭りの夜，当選祝いの浮かれた気分のなか，ジッドは農場で働くフェルディナンと出会う。原稿が語るように，その出会いは偶然によるものではなく，ルアールのお膳立てがあったようだ。彼はジッドとの長いつきあいのなかで，友人の好み（それは彼自身の好みでもある）を熟知していたからである。ジッドとフェルディナンは，祭りの喧騒から離れ，月明かりのもと，官能的な一夜を過ごす。翌朝ジッドは「10 歳も若くなったように感じた」［*R*, 32］ことを『ル・ラミエ』の掉尾に記す。その時ジッドは 37 歳，フェルディナンは 17 歳であった。

『一粒の麦』が伝えるように，ジッドの性愛の対象として強い印象とともに描かれるは，「神のような」［*Sgm*, 280］そして「悪魔のような」［*Sgm*, 285］北アフリカの褐色の肌をした青少年たちであった。一方，フランスにおいては，農場で働く日に焼けた若者たちがジッドを惹きつけた。フェルディナンに出会う前から，ジッドはそうした若者たちと交歓を重ねていたが，彼らが『ル・ラミエ』のようなかたちで描かれることはなかった。フェルディナンもまた，ジッドがかかわった無名かつ無数の若者のひとりとして，一時の快楽とともに作家の記憶から消えてゆくはずであった。では，フェルディナンの何がジッドをして書くことへと駆りたてたのか。

フェルディナン「ラミエ」の描写

ジッドは 1907 年以前にもバニョルをいく度か訪れているので，そこで働くフェルディナンを目にしたことはあったはずだ。しかし祭りの夜まで若者が作家の興味を惹くことはなかった。夏の夜，はじめて気付いたフェルディナンの美しさは次のように描写される――

> 〔…〕フェルディナンは兄よりも 1 歳下〔の 15 歳〕。今まで農場で彼の姿を気に留めたことはほとんどなかった。〔…〕彼は膨らんだ形の平織りのズボンをはいていた。ズボ

> ンを膝のところでサンダルの紐を使って締めつけていたので，まるで〔トルコの奴隷兵〕マムルークのようであった。軽い上着はぴったりとしていて，彼のすらりとした体つきを際立てていた。どのような帽子をかぶっていたかは思い出せないが，さほど長くない髪が額のうえにくしゃくしゃと下がっていたのは覚えている。前を広げた上着からのぞくシャツは，その地方でよく見るくすんだ青色であった。［*R*, 23-24］

フェルディナンは15歳とされているが，これはジッドの誤認。当時フェルディナンは17歳である。彼は実年齢より幼く見えたのであろう。『ル・ラミエ』では，フェルディナンの「子供っぽい（gamin）」［*R*, 29］声の調子や，「きわめて無垢（une extraordinaire innocence）」［*R*, 28］な様子が強調されている。洗練とは程遠いながらも飾らないフェルディナンの姿にジッドは惹きつけられたのか。上の引用において，ジッドの視線は下から上へとのぼり，衣服の描写はその内側にあるすらりとした体つき（sveltesse）へとつながる。さらにジッドは視線のみでなく，手や唇でもフェルディナンに触れている。美しい若者の日に焼けた肌は「なめらかで燃えるように熱い」［*R*, 30］。

15歳にしか見えない17歳の青年，不格好な衣服に包まれたしなやかな体つきといったフェルディナンの姿は，ジッド作品を知る者には既視感があるだろう。先の描写からただちに想起されるのは，フェルディナンとの一夜からさかのぼること5年前に発表された『背徳者』（1902年）である。

『背徳者』の語り手ミシェルは，アルジェリアで友人たちを前に，彼が現地の少年たちとかかわりながら死の病を克服したこと，また同時に，夫の健康状態に呼応するかのように病に倒れた妻を見殺しにしてしまった経緯を語る。北アフリカを舞台とした第1部と第3部に挟まれる第2部の舞台はフランス，ノルマンディーの田舎。自らの地所で，ミシェルは大学の講義を準備し，体調のすぐれない妻をいたわりながら過ごす。「背徳」とは無縁の，表面的には穏やかな生活のなかで，農場の若者シャルルが登場する。挨拶に訪れた彼をミシェルは眺める――

> 立派な体格をした若者で，健康にあふれ，しなやかで，堂々としている。そのためか，私たちに敬意を表して着込んだよそいきの服はひどいものだったが，さほど滑稽には見えなかった。内気さのためか，もともと美しい頬の赤みがほんのりと増した。彼は15歳にしか見えなかった。それほど彼の澄んだまなざしは子供らしいままだった。[10)]

ミシェルは，田舎じみた衣服が包むシャルルの健康的な体の輝きを見逃さない。

また，シャルルは「15歳にしか見えない」とある。これは物語において，ミシェルがすでに青年が17歳であることを知っているがゆえの感想であるため，シャルルの容貌や態度の幼さがより強く印象付けられる。シャルル，フェルディナンともに，17歳が15歳にしか見えないこと，あか抜けない衣服からしなやかな体つきが浮かびあがる様子が共通して描かれている。

もちろんジッドが描く2人の「農場の若者」の一方は作中人物，他方は実在の人物である。シャルルの人物像は，農場で働く若者たちとの作者自身の経験をもとにしてはいるが，時間的には，『背徳者』は『ル・ラミエ』（の原稿）に先立つ。そのため，フェルディナンをシャルルのモデルとすることはできない。さらに『背徳者』におけるミシェルとシャルルは，『ル・ラミエ』のジッドとフェルディナンとは異なり，あくまで地主と使用人としての関係を保つ。しかし，ミシェルがシャルルを含めた農場の若者たちと川でウナギ取りに興じる場面，また暴れ馬を見事に飼いならしたシャルルとミシェルが夜明けに馬で疾走する場面は，主従を越えた官能的な美しさに満ちている。シャルルには，実体験をもとにしたジッドの理想が反映されていると考えてよいだろう。それゆえに，1907年夏，フェルディナンを前にした作家の驚きと喜びは想像に難くない。ジッドにとってフェルディナンは，まさに自分が描いた理想の体現者として現れたのだ。

『ル・ラミエ』には，フェルディナンと『背徳者』のシャルルを重ね合わせるような記述はない。とはいえ，フェルディナンとの交歓がジッドの記憶を甦らせたのは確かである。『ル・ラミエ』の掉尾，官能の一夜が明けた最後の節――

> その朝ずっと，私は心身ともに極めて快調で，活気に満ちあふれていた。それはちょうど，アルジェではじめてモハメッドと過ごした夜の翌日と同じであった。心弾み，喜びにあふれ，何キロメートルでも歩けたことだろう。10歳も若返ったかのようだった。［*R*, 31-32］

フェルディナンが去り，ひとり夜明けを迎えたジッドが思い出すのはアルジェのモハメッド。1895年1月末，怪しげな夜の酒場（その時ジッドの横にいたのはオスカー・ワイルド）に現れた「素晴らしい若者（un adolescent merveilleux）」［*Sgm*, 306］について自伝は次のように語る――

> 彼の瞳は大きく黒く，ハシシュのために目つきは物憂げだった。顔はオリーヴ色で，

> 葦笛を吹く長い指，すらりとした子供っぽい体つきは素晴らしかった。膨らんだ形の白い半ズボンから延びる素足は華奢で，片足はもう片方の膝のうえで組まれていた。［*Sgm*, 307］

ジッドの視線は，顔から指そして足へと（フェルディナンとは逆に）上から下へと移る。日に焼けた肌，ほっそりとした体つき，子供っぽさ，奇妙な服装にひきたてられる優美な姿態は，フェルディナンやシャルルと共通する。1895 年のモハメッド，1902 年のシャルルそして 1907 年のフェルディナンが，フィクションとノンフィクション，時空を越えて重なり合うのが見て取れる。

実在した 2 人の若者，モハメッドとフェルディナンは，その姿の優美さにおいてのみ，あるいは快楽の強さによってのみジッドのなかで二重映しになっているわけではない。自伝においてジッドは，モハメッドが去り，夜が明けたときのことを回想する――

> 空がほの明るくなり始めるや，私は起き上がった。私は走った，そう，本当に走ったのだ。サンダルを履いて，ムスタファの向こうまで。昨夜の疲れなどまったく感じることなく，それどころか，浮きたつような心身の軽さはその日ずっと続いた。［*Sgm*, 310］

『ル・ラミエ』の最後では，フェルディナンと過ごした翌朝にジッドが感じた爽快な気分が語られていた。「歩く」「走る」の違いはあるが，それはかつてモハメッドと過ごした翌朝にジッドが覚えた高揚感が甦ったものだろう。「10 歳若く感じた」のは，かつてモハメッドと出会った頃（正確には 12 年前）に戻ったかのような感覚を示しているのかも知れない。

『一粒の麦』にあるように，ジッドはモハメッドを通してようやく「自らの正常態」を悟ることができた。それゆえ，モハメッドとの夜は忘れ得ぬものとなり，ジッドは「それ以降，快楽を探すたびに，この夜の思い出を追い求める」［*Sgm*, 309］ようになった。そしてフェルディナンとの出会いによって，ついにモハメッドとの夜そして迎える朝をふたたび我がものにできたのである。フェルディナンは単にモハメッドと重なるばかりではない。『ル・ラミエ』ではさらに，フェルディナンが愛に身をゆだねる「自然で，優しく，優美な様子はいままで経験したことのないものであった」［*R*, 29］，「これ以上に美しい夜を私は知らない」［*R*, 30］と最上級の表現が繰り返される。フェルディナンは，ジッドの

性愛の経験において頂点に位置するものとして描かれているのである。この特別な一夜を書き留め，創作に生かしたいという小説家ジッドの衝動は十分に理解できる。

しかしながら，作家の存命中に『ル・ラミエ』が発表されることはなかった。なぜジッドは自らの最も美しい体験を封筒に入れたままにしたのであろうか。続いて，その理由のいくつかについて考察を進めたい。

原稿が出版されなかった理由

まず最初に考えられるのは時代背景である。1907 年のフランスで同性愛を語ることは，社会通念から大きく外れる危険な試みであった。かつてアルジェで「あのミュージシャン〔モハメッドのこと。このとき少年は葦笛を吹いていた〕が欲しいのか」[*Sgm*, 307] とジッドに問い，哄笑したオスカー・ワイルドが有罪とされ，失意のうちに亡くなったのは，ほんの数年前のことにすぎない。フランスにおいて同性愛は，ただちに法律上の罪に問われることはなかったとはいえ，実際にはさまざまな場面において断罪の対象となっていた[11]。さらに 10 年あまり後のプルーストとの会話が示すように，同性愛を「一人称」で語ることは容易ではなかった[12]。ジッドが『コリドン』の普及版を刊行できたのが 1924 年。『一粒の麦』も同様，北アフリカでの同性愛体験も含めた普及版の販売開始は 1926 年であったことを思い出そう。

『ル・ラミエ』はまさに少年愛実践の記録であり，具体的な日付けと，実名での人物や土地が示されるばかりでなく，あからさまな性的表現もある。公刊をとどまったジッドの判断は妥当なものと言えよう。地元の名士ルアールへの気遣いや妻マドレーヌへの遠慮も含めて，1907 年の時点では未だ機は熟していなかったのである。

こうした社会的要因のほかに，文学上の理由も挙げられよう。『ル・ラミエ』が語るように，ジッドはフェルディナンとの一夜について，ただちにルアールにうちあけた [*R*, 31]。それに触発されたルアールは，自らの農場で働く若い小作人に俄然興味をいだき，すぐさま関係を持つようになる[13]。ルアールが『ル・ラミエ』の原稿を読んだ確証はないものの，少なくともその存在は知っていたのであろう。彼もまたフェルディナンの「物語（ロマン）」を書き始めたからだ。友人から送られてきた冒頭部を読んだジッドは「少し場面が曖昧だ」[14] と感想を述

べ，続きを書くよう助言する。

まだ20代であったジッドとルアールをはじめに結びつけたのは文学であり，後者にも文学的野心はあったのだが，何よりも彼は農学者であり農場経営者であり，地方そして将来的には国政を担う政治家であった。いくつかの雑誌掲載文を別にすれば，ルアールが上梓したのは，1898年の『主なき館』のみである。しかも，このルアール唯一の小説の成立にはジッドが深くかかわっている。執筆の捗らぬルアールを励まし続けたことは言うまでもないが，この小説に登場するメナルクという名の人物は，ジッドの『地の糧』に出てきたメナルクであり，さらには『背徳者』のメナルクへと発展する。つまり両作家の間には，同名の登場人物を軸に一種の共作関係が成立していたのである[15)]。フェルディナンをめぐる物語においても，ルアールはジッドとの「共作」をふたたび望んでいた可能性は高い。しかし，ウォーカーが『ル・ラミエ』後書きで指摘するように，ジッドはこうしたスキャンダラスな体験にもとづいた話は自分以外の者の仕事だと考えたのであろう。そういった慎重さにくわえてジッドは，友人が書き進める「物語」によって，自身のフェルディナンとの美しい思い出が損なわれることを怖れたのかも知れない[16)]。そもそも彼は物語の芽を十分すぎるほどの時間をかけて育てる作家ではなかったか。結局，ルアールによる「物語」は完成したのかどうか不明，その原稿の行方も今のところ不明のままである。

さらにもう一点，肝心のフェルディナンのその後についても言及せねばなるまい。自転車で野道を疾走し，農作業に汗を流していたであろう若者は，ジッドとの一夜から3年も経ぬうちに，結核性の病により20歳で夭逝する。ルアールは地主として入院など病人の庇護に努め，ジッドへもその病状を逐一書簡で知らせている。青年の死（1910年4月7日）をジッドへ伝えたと考えられるルアールの書簡は残っていないようだが，若者の早すぎる死を知ったジッドはただちに友人に宛てて返事を送る――

> 君からの悲しい手紙を，どのような悲痛な思いで僕が読んだか分かるだろう。今朝，僕の思いはバニョルへと向かう。〔…〕君は，悲しみ，苦しみ，沈んだ気持ちでいることだろう……僕には君に手紙を書くことしかできないが，顔を見てならうまく話せるように思う。いつ，君にまた会うことができるだろうか。[17)]

悲しみにくれる友を思いやる手紙。しかし，そこにフェルディナンの名は記さ

れていない。この手紙に限らず，『ル・ラミエ』が書かれた以降，ジッドの筆に農場の若者についての記述はほとんど見当たらない。フェルディナンの病と死に対してジッドはどのような思いをいだいたのだろうか。病状を伝えるルアールからの手紙を読んで，ジッドは「ラミエの病気――ルアールは心かき乱されている」[18] とごく簡単に記すのみ。無関心とまでは言えないものの，「心乱れる」のはあくまでルアールであってジッドではないのだ[19]。フェルディナンの死についても，ジッドの日記は沈黙している。若者の死から 4 カ月後の 1910 年 8 月，ジッドはバニョルを訪れ，ルアールはじめ友人らと様々な場所に繰り出していた。ようやく「ラミエ」が現れるのは同月 18 日の日記である――

> シャツを着たままではなく，裸で横たわるほうが自然であることを官能とともに感じる。部屋の窓は大きく開かれ，月光がベッドをくまなく照らす。ラミエとの素晴らしい夜のことが思い出され胸が締めつけられた。でも，体においても，そして心や精神においても，私は一切の欲望を感じなかった。[20]

この「ラミエ」がフェルディナンであることは，『ル・ラミエ』に描かれた一夜を見れば明らかである。かつての夜も月が輝いていた――

> 〔…〕私たちは大きなベッドの上にいる。ランプを消し，窓とよろい戸を夜と月に向かって大きく開け放った。〔…〕月明かりに照らされた小さな灰色の体の美しさはどのような言葉をもってしてもあらわすことはできないだろう。［*R*, 29］

日記がフェルディナンの死を直接語るわけではないが，そこには明るい大きなベッドがあるのみで，かつてジッドを陶然とさせた「月明かりに照らされた小さな灰色の体」［*R*, 29］はない。フェルディナンの不在すなわち死がジッドを悲しませたことは疑えまい。だが，ルアールへの手紙にある「悲痛な思い」は，亡くなったフェルディナンへのジッドの気持ちではなく，むしろ「ラミエ」を失った友ルアールへの思いにつながっていく。日記が示すのもやはり，甘美な思い出に浸る姿であって，青年の死を悼む悲しみではない。

『コリドン』では，ギリシア的愛（少年愛）の対象となるのは 13 歳から 22 歳の若者とされている[21]。その理論どおり，ジッドが愛した若者の美しさは長くは続かない。『背徳者』のシャルルは，一時ミシェルの農場を離れ，数年後彼のもとへ戻ってくる。その時のシャルルへの幻滅をミシェルは隠さない――

> 彼〔シャルル〕は戻ってきた。――ああ，恐れていたとおりだった，メナルクがいかなる思い出も認めないと言っていたのは正しかった！――入ってきたのは，シャルルではなく，ばかげた様子の男だった，滑稽な山高帽をかぶっている，ああ神よ！ 彼はなんと変わってしまったことか。[22)]

同様に『一粒の麦』でも，自らの同性愛を受け入れるのに決定的な役割を果たしたモハメッドでさえ，年月の経過による変化は作家を戸惑わせる――

> モハメッドに2年後再会した。彼の顔はほとんど変わっていなかった。〔…〕体も優美さを保っていたが，そのまなざしは，かつての物憂げな様子を失っていた。何かよく分からないが，その目つきには，強情で，落ち着かない，下劣なものがあった。[*Sgm*, 310-311]

かつて愛した若者に再会して感じる落胆をジッドはフィクション，ノンフィクションにかかわらず描く。モハメッドやシャルルと重ねるように描かれたフェルディナンは，しかしながら，その死により若さの輝きのみを残し，他の2人とは決定的に異なる存在となってしまった。もし，フェルディナンが病に倒れることなく，数年後に「ばかげた様子の男」としてジッドの目に映れば，彼もまた何らかのかたちでジッド作品に描かれたのかも知れない。

結　語

たしかに『ル・ラミエ』の原稿は封筒から出されることなく，フェルディナンがジッド作品においてふたたび描かれることはなかった。しかし，それは若者が作家の記憶から消えたことを意味しない。

『一粒の麦』を収録するプレイアッド叢書『回想と旅行記』には，自伝用準備ノートの一部が資料としてあげられている。そのなかの「アルジェのモハメッド」は，ワイルドとの会話など大筋において自伝にそのまま用いられた。ノートの最後の部分は次のとおり――

> 朝の5時ごろ，空が白み始めるや，私は起き上がった。私は走った。そう，サンダルを履いて私は走った。ムスタファまで。〔…〕昨夜の疲れなど一切感じることなく，それどころか，浮きたつような心身の軽やかさは，その日ずっと続いた。自分が飛べないことに驚くほどであった（私は同様の陶酔と若返ったかのような素晴らしい感覚をラミエとの夜の後に味わった）。[23)]

この文が書かれたのは，作家自身の日記が示すように 1910 年 6 月 21 日，フェルディナンの死からおよそ 2 カ月後のことである[24]。括弧に入れられた一文は『一粒の麦』には残らなかったが，ジッドのなかでモハメッドとフェルディナンがはっきりと重ねられていることの何よりの証左である。

このノートにおいてもフェルディナンの名はない。『ル・ラミエ』以外で彼の名が記されるのは，1907 年 8 月 1 日の日記のみで，以上に見てきた若者についての数少ない記述には，すべて「ラミエ」と書かれている。農場の若者はその名ではなく，「森鳩ラミエ」としてジッドの記憶に定着しているのだ。そのことは，『新しき糧』における次のような詩が示す――

> 森鳩（ラミエ）は枝々の間を喜び飛びまわる――小枝は風に揺られ――風は洋上の白い船をかしげる――光る海が木の間から見える――それは白い波頭――それらすべての笑い声，紺碧，輝き――親愛なる君よ，語られるのは我が心――我が心が君の心へ語るのはその幸福。[25]

ピエール・マッソンが註釈を付すように，この一節は明らかにフェルディナンとの思い出をもとにしていよう[26]。『新しき糧』の出版は 1935 年ではあるが，上の詩は「4 つの歌」の第 2 歌として『ラ・ファランジュ』誌 1911 年 5 月号に掲載されたものである[27]。青年の死からさほど日を経ていないことから，この詩を彼へのオマージュとして読むこともできよう。

さらに『新しき糧』では，少し先にふたたび森鳩が現れる――

> 私はもう言葉を翼によってしかとらえないだろう。君か？ 我が歓びの森鳩（ラミエ）よ。おお，天へ向かって，まだ飛びたつな。ここへ来て憩え。
>
> 私は地に横たわる。傍らには枝が輝くばかりの果実をつけて，草に届くほどたわんでいる。枝は草に触れる。芝草のもっとも柔らかい穂先にそっと触れて愛撫する。その鳴き声の重みが枝を揺らす。[28]

その若さと美しさによってジッド的性愛の理想を体現したフェルディナンは，『ル・ラミエ』にとどまり，作家の創作において農場の若者と分かるかたちでふたたび用いられることはなかった。しかし彼は，フェルディナンという名を失い「ラミエ」と名付けられたことで，モハメッドやシャルルとはまったく異なるかたちでジッド作品に現れる。フェルディナンは「歓びの森鳩（ラミエ）」となり，優

しい鳴き声とともに天へと飛びたち，ジッドの記憶そしてその詩のなかに生き続けたのである。

註

1）André Gide, *Le Ramier*. Avant-propos de Catherine Gide. Préface de Jean-Claude Perrier. Postface de David H. Walker, Paris : Gallimard, 2002.『ル・ラミエ』からの引用については，各末尾［ ］内に書名の略号 *R* と頁数を示す。引用はすべて既訳を参考とした拙訳。『ル・ラミエ』に関しては，最近刊行された森井良訳を参考にした（『ラミエ』，『特別な友情――フランス BL 小説セレクション――』所収，新潮文庫，2020 年，103–117 頁）。

2）*Ibid*., p. 9（avant-propos de Catherine Gide）.

3）『コリドン』が私家版として 12 部のみ刷られたのが 1911 年，普及版は 1924 年に公刊された。

4）André Gide, *Si le grain ne meurt*, dans *Souvenirs et voyages* [abrégé ensuite : *SV*], éd. Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 310. 本文中，自伝からの引用は，各末尾［ ］内に作品の略号 *Sgm* 頁数を示す。

5）« the love that dare not speak its name ». アルフレッド・ダグラスの詩『二つの愛』の一節。男性同性愛，より正確にはユラニスムを指す。

6）Voir Paul Claudel – André Gide, *Correspondance (1899-1926)*. Préface et notes par Robert Mallet, Paris : Gallimard, 1949, p. 217（lettre de Claudel à Gide, 2 mars 1914）.

7）André Gide, *Journal, I (1887-1925)*, éd. Éric Marty, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 576.

8）*Ibid*., p. 1533（note 5 pour la page 576）.

9）Claude Martin, *André Gide ou la vocation du bonheur (1869-1911)*, Paris : Fayard, 1998, p. 633（note 63）.

10）André Gide, *L'Immoraliste*, dans *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques* [abrégé ensuite : *RR*], 2 vol., éd. Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. I, p. 635.

11）Voir *Les Corydon d'André Gide*, présentés par Alain Goulet avec le texte original du *C.R.D.N.* de 1911, Paris : Orizons, 2014, p 20. グーレはここで 1907 年から 1909 年当時のヨーロッパで同性愛嫌悪が問題となった事件を列挙し，こうした時代状況によりジッドが『コリドン』の必要性をより一層自覚し，出版に向けて準備を進めたと述べている。

12）Voir Gide, *Journal, I, op. cit*., p. 1124（14 mai 1921）.

13）ウジェーヌ・ルアールは 1907 年 7 月 31 日付けの書簡で「あのラミエを飼いならそ

うと思う」とジッドに書き送っている（André GIDE – Eugène ROUART, *Correspondance*, 2 vol., éd. établie, présentée et annotée par David H. WALKER, Lyon : Presses universitaires de Lyon, 2006, t. II, p. 269）。ルアールは，生粋のパリジャンであるにもかかわらず，首都を嫌い，フランス南西部に購入した土地で実験的な農場経営を行った。「デラシネ論争」「ポプラ論争」を総括するかたちで『レルミタージュ』誌に寄せた記事のなかで彼は，「〔パリの〕オペラ座よりも，〔我が土地の〕森鳩（ラミエ）がポプラの木にかける巣のほうが好ましい」と記す（« Un prétexte », *L'Ermitage*, décembre 1903, p. 261）。ルアールの論考は小論とは直接の関係はないが，バニョル・ド・グルナードで書かれたものであることから，その地では森鳩の鳴き声が響いていたことが分かる。フェルディナンを「ラミエ」と名付けたのはルアールかも知れない。ジッドは『ル・ラミエ』でフェルディナンの声を単に「鳩（colombe）のような鳴き声」［*R*, 28］としており，ルアールに話してはじめて「森鳩（ramier）」［*R*, 31］の語が用いられるからである。

14）GIDE – ROUART, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, p. 273（lettre de Gide, 11 août 1907）.

15）Eugène ROUART, *La Villa sans maître*. Préface de David H. WALKER, Paris : Mercure de France, 2007. メナルクをめぐる両者の「共作」については，ウォーカーによる序文に詳しい。

16）Voir GIDE, *Le Ramier*, *op. cit.*, p. 40（postface de David H. WALKER）.

17）GIDE – ROUART, *Correspondance, op. cit.*, t. II, p. 337（lettre de Gide, 9 avril 1910）.

18）*Ibid.*, p. 301（note 5）. フェルディナンの病気に関するジッドの短い一文は，自伝準備用書類『私自身について』（*De me ipse*）のなかにあったもの。

19）たしかに，ジッド自身もフェルディナンの病気を知らせるルアールへの返事に「心乱されている（affoler）」と書いてはいる（*ibid.*, p. 299, lettre de Gide, 24 août 1908）。しかしジッドを苦しめているのは，「南フランスへのおそろしいほどのノスタルジー」であって，フェルディナンの名前はやはりどこにもない。

20）GIDE, *Journal, I, op. cit.*, p. 647（18 août 1910）.

21）André GIDE, *Corydon*, in *RR*, t. II, p. 142.

22）GIDE, *L'Immoraliste*, in *RR*, t. I, p. 664.

23）André GIDE, « Mohammed d'Alger », in *SV*, pp. 1112-1113.

24）GIDE, *Journal, I, op. cit.*, p. 643（21 juin 1910）.

25）André GIDE, *Les Nouvelles Nourritures*, in *RR*, t. II, p. 750.

26）*Ibid.*, p. 1331（note 4 pour la page 750）.

27）André GIDE, « Quatre chansons », *La Phalange*, 20 mai 1911, pp. 385-389.

28）GIDE, *Les Nouvelles Nourritures*, in *RR*, t. II, p. 752.